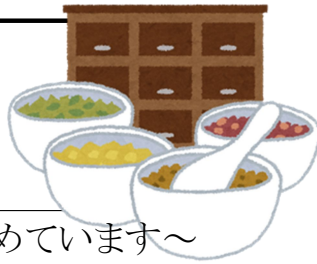
学びのスタジオ

漢方を知る No.2



～知っているようで意外と知らない「漢方」を鍼灸師の目線でまとめています～

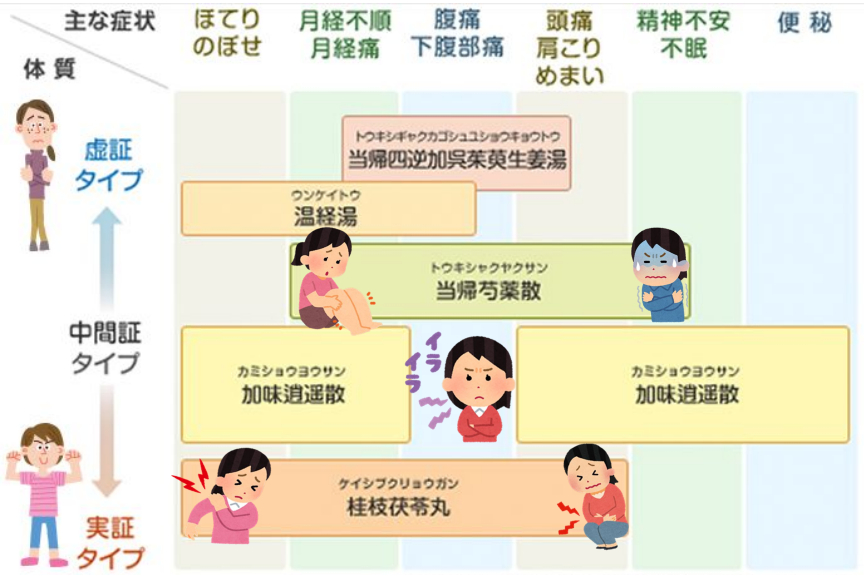
長く飲まないと効果がない？以外に多い漢方の勘違い

「長く飲まないと効果ないんでしょ？」

漢方について、こういう言葉を耳にします。体質改善や慢性的な症状を治したい時には、一～二カ月くらいの期間が必要な場合が多いですが、症状によっては、すぐに効果を実感できる漢方薬もあります。

漢方薬は決して奇跡を起こすものではなく、漢方薬が適している症状を見つけて、その症状にシャープに効く処方を見つけることにつきます。現在漢方治療を受ける患者さんのほとんどが慢性難治性疾患ですので、長期間の服用を必要とすることが多いのも誤解を招く原因ともいえます。

更年期症状に用いられる漢方薬



「冷え症及び関連する症状の漢方治療ABC」より

漢方の古典『黄帝内経素問（こうていだいけいそもん）』では、女性は7年ごとに節目があり、体や心に変化が起こると捉えていました。これによると、42歳あたりから白髪が生え始めるなど、加齢の兆しが見え始め、49歳ぐらいで閉経にいたるというわけです。ここから、女性の年齢による体の変化は今も昔もそう変わらないことが分かります。昔は更年期や更年期障害という概念こそありませんでしたが、その時期に起こったさまざまな不定愁訴に対しては、漢方薬が使われきました。検査では異常がないけれど、本人はつらい症状を持っている。不定愁訴の治療は漢方治療がもっとも得意とするところです。

女性の三大処方

女性に使う漢方薬として三大処方といわれるのは、当帰芍薬散（とうきしゃくやくさん）、加味逍遥散（かみしょうようさん）、桂枝茯苓丸（けいしぶくりょうがん）です。

三つの処方を一度に飲んだらいいじゃない？と思ったあなた。なかなか鋭いですが、足せば効果も上がるとならないのが漢方薬です。だからこそこの三剤がそれぞれ独立した処方として残っているのだと思います。この三つをうまく使うことで幅広い女性の愁訴に対応できるのです。